

市民型公共事業 霞ヶ浦アサザプロジェクト
付加価値の連鎖で地域を元気にする
問題解決型から価値創造型へ

飯島 博 委員 (特定非営利活動法人 アサザ基金 代表理事)

(この講演録は、飯島委員の講演をもとに GISPRI 事務局が取りまとめたものです。)

● 飯島委員 アサザ基金の飯島です。よろしくお願ひいたします。私の方から霞ヶ浦で行なっている市民型公共事業について事例報告させていただきます。

【PPT1-2】この黄色い花が私どものプロジェクトのシンボルであるアサザという野生の植物です。絶滅危惧種です。これが霞ヶ浦の流域です。日本で 2 番目に大きな湖で、大変広大な流域を持っています。約 2200 平方 Km です。山は筑波山塊で、あとは平坦な地域です。細かい湖がありますがそれと合わせて霞ヶ浦です。

【PPT3】この広大な霞ヶ浦において、“自己完結しない！、付加価値の連鎖”の起こるような事業をしています。実際に行なっている代表的なものを表しています。従来の農林水産業から公共事業、それから福祉や教育、研究、観光など様々な事業を、アサザプロジェクトでは自己完結型ではなく縦割りの壁を越えて、新しいお金や人やモノの動きを作り上げていく、という流れで展開しています。

【PPT4】最初に代表的事例を紹介しますが、2000年に国土交通省と協働で行った大規模な公共事業です。34億円で行なった日本で最初の自然再生事業で、自然再生推進法のモデルになりました。

【PPT5】それから湖の反対側、最上流の水源地、こちらは今、大変荒れてしまって耕作放棄地が増えて環境が非常に悪化しています。そこで、大手企業、地場産業、それから住民と協働で、いわゆる自然保護ではなく、価値創造による再生を行なっています。

【PPT6】生物多様性や水質保全に寄与する、新しいヒトやモノやお金の流れを作り上げて行く、ビジネスモデルの展開をしています。

【PPT7】それから流域全体を隈なくネットワーク化していくうえで重要なことが、各小学校、中学校で行なわれている環境学習です。

【PPT8-10】この広大な流域を、いわゆる組織のネットワークではなく、取り組みのネットワークで被い尽くしていこうという発想で行なっています。つまり私どもには組織化されたネットワークはありません。

霞ヶ浦は広大な流域を誇っておりまして、28の市町村、3県にまたがっています。ですから、流域単位の事業展開は行政はもちろん民間も出来ない。霞ヶ浦の問題にアプローチ

すること自体が非常に困難です。生態系レベル、流域レベル、の取り組みが難しいので「新しい公共」の考え方が出てこなければならぬわけです。いわゆる“従来の公共”では“縦割りの壁”を越えられない。「新しい公共」という空間を私たち自身が霞ヶ浦という流域単位で作り上げないと、新たな事業、公共を生み出すことが出来ない、という命題が私たちにはあります。

【PPT11-12】そういう状況の中で、霞ヶ浦開発事業は1960年代から行なわれていまして、非常に環境が悪化してしまいました。水質の悪化、それから生物多様性も崩壊に近づいています。特に水質悪化のためにアオコという植物プランクトンが大発生して、“アオコの湖”と呼ばれるようになりました。90年代までいろいろな施策が講じられ、約1兆円のお金が水質改善のために使われましたが、水質は悪化の一途、改善の見込みが示せないという閉塞状況の中にあっただけです。90年代、私ども市民団体も発想を変えてイチから出直そうということで、霞ヶ浦の湖岸は1周250kmあるのですが、歩いて調べ始めました。それが94年でアサザプロジェクトの始まりです。湖岸の徒歩調査の中で様々な資源、眠っているいわゆる“お宝”に気づきました。その一つが“アサザ”という水生植物です。霞ヶ浦には国内有数のアサザ群落地があることがわかりました。それまで全く注目されていなかったのです。この湖にある良いモノを活かして、良いところを増やしていけば、結果的に悪いものが減るのではないかと発想の転換です。それまでは、悪いもの“アオコ”をどうやって減らせば良いかをみんな考えていた。つまりマイナスのものを減らしていくのに対してプラスのものを増やす、いわゆる価値創造的な発想転換をアサザが促してくれました。

【PPT13】95年からアサザの里親制度を始めました。誰でも思いつくことですが、アサザと言う植物が絶滅に瀕してましたので、その種子を集めて里親の皆さんに送りました。最初の年、95年は200人程度でしたのが、職場単位、学校単位での取組みが徐々に広がりまして、翌年から5千人、1万人と、あっという間に数万人規模の取組みになりました。何が良かったのかというと、それまで水質検査をしたりゴミを拾ったりという関わり方しかできなかったのですが、湖に良いモノを増やしていける、しかも自分で育てたものをそこに置いていける、みんなが湖に働きかけられるアプローチが出来たようになったということです。

それからもう一つは、植えたアサザが広がっていくと波を弱めて、水辺の植物を波から守ることができるので、いろいろな植物をまた植えていくと、徐々にではあるけれど、みんなのネットワークの輪で、あの大きい湖全体をじわじわ良くできるのではないかなと、これは一つの物語ですね。それまでは、自分たちがあの大きい湖に対して、何も出来ない、国に要望するしかないと思っていたところに、小さな一人一人の取組みが積み重なって、ネットワーク化すれば、湖全体を変えていけるのではないかと、いわばあの大きな空間が

ファンタジー化した、というところに参加者を増やした大きな要因があると思います。

【PPT14】湖に実際に小学生が入って活動するという画期的なことが、97年ごろから起きました。(この写真の)ここは横にコンクリートの垂直護岸があって、“良い子はここで遊ばない”という看板が立っています。水が濁ってますし、危険であるし、汚いから、“近づいてはいけない”と学校で指導していたところに授業中に子供が入って植え付けをするというのは画期的なことなんです。

【PPT15】その様子を見ていた地域の方々、特に漁師さんとか地元の住民の皆さんが、「子供たちが活動しているから自分たちもやらなきゃいけない」と、みんなが協力し始めて、いろんな活動がそこからどんどん広がって、最初にご紹介したような循環する事業に展開して行った。今年の3月までに延べ20万人が参加する事業になりました。

【PPT16】私どもは、“失われたネットワークを取り戻していく”、ということの主眼にしています。自然環境のネットワークを取り戻していくということは、環境問題に取り組むNPOとして当然なのですが、それ以前に、社会的ネットワークの構築もしていく必要があります。技術的にどのように生息環境を作ったら良いかとか、川の環境をどうしたら良いかという生態学者や環境関係の学者、専門家、NPOがやっている手法はあるのですが、それをいかに社会化していくか、社会的に実現するか、という部分については、社会システムに対してアプローチしていかないといけない。新たな社会システムを作らなければ実現しないと思っています、

【PPT17-18】それから、従来の環境対策とか環境技術、これは企業や研究者だけでなく、NPOも全く同じです。みんな部分最適化して、全体が見えない。もう一つは、研究者は制度論が好きといいます、NPOも好きです。「新しい公共」の中でも、制度論はずいぶん出てくると思いますが、そういう制度論的発想から抜け出して、全体最適、要するに新しい社会システム、あるいは総合化が起きるような流れをどう作っていくのか、というところに踏み込んでいく必要があると思います。それは、霞ヶ浦に取り組む以上、あれだけ広大な流域を相手にするので、絶対実現させないといけないのです。規制や制度というものは、固定した枠組みやゾーニングを前提としていますので、新たな社会システムの構築には繋がらないのです。それからその中で産み出されてくる規制や制度に対応した環境対策や技術というものは、当然部分最適化すると思っています。新しい社会システムを産み出していく、その構築に繋がるような技術だとか、制度的見直しが必要になってくるだろうと思います。そういう意味では、規制や制限に依存するのではなく、むしろ、“欲望をデザインする”発想が必要だと思っています。欲望が作り上げる生き方や、空間、時間というものを、修正するだけでは変えていけない。新しい欲望のデザインというものが必要だと考えます。

【PPT19】そういう意味では、私どもはいわゆる制度論的なアプローチはあえて避けて、

ちょっと迂回して、その地域の土地に眠っている様々な文脈を掘り起こして、それぞれの地域の持っている様々な潜在的な機能や資源を見出して行く。そして新しい文脈の中で、それら地域固有の、あるいは、地域に眠っている資源とか価値を、付加価値の連鎖として展開していくようなデザインをしていく。それをモデル事業として実施する中で、効果を見出して明らかにし、既存の制度的なアプローチと比較することによって、制度が目指しているのと同等の効果が、私どもの目指している新たな文脈作りの中でも実現できますということを示しながら、制度的な議論に対しても刺激を与える、という流れで仕事を行なっています。こういった地域・土地の文脈の中で、みんなでいろいろな価値を見出していくことは、土地の全ての人たちが関わっていくことができることなんです。制度論的な枠組みの中での議論は、専門的な知識のある人しか参加できない、というところに限界があると思います。社会技術ということが言われていますが、社会技術化というのは、私どもの土地の文脈を見出して、そこに新たな付加価値の連鎖を生み出していくような取り組みの中でしか実現しないと思います。

【PPT20】 総合化というものは「する」ものではなく、「起きる」ものだと思います。そのためには“場の創出”というものが必要ですね。

【PPT21】 総合化の起きる場をどう作っていくのか。先程からの議論だと、アサザプロジェクトはこういうネットワークで動いているのですが、これが「新しい公共」なのかもしれないと思っています。いわゆる“場”です。私どもは中心に組織の無いネットワークを作っており、中心には場があって様々な主体が具体的な事業を通して繋がっている。この中では、協議会もネットワークの組織・事務局もありません。具体的な事業を組める、責任を持って遂行できる組織同士が繋がりがあって、私どもが提供した“場”を活かして、新たなビジネスモデルを展開していく、ということです。

行政や大学、農林水産業など専門的に分化した組織が中心に来るのではなく、むしろそれらをネットワークの中で、上手く適材適所に配置して、様々な主体と自由に組めるような体制を作って、より専門的な機能を発揮できるようにして行こうということです。これが実際に私どもの取り組みに関わっているところで、今新しいところもどんどん入ってきてるのですけれども、こういうネットワークが出来ています。国民生活白書で紹介していただいたものです。

【PPT22】 ピラミッド型社会における市民参加から、私どもは自分達でどんどんネットワークを作っていきますので、先程のスライドでお見せしたネットワークの展開が可能です。そのネットワークの中に行政を参加させて、行政に今まで以上に専門的な機能を発揮できるような“場”を創出していくことを考えておきます。中心に組織の無いネットワークということです。企業に関しても全く同じで、ネットワークの中で、先程の議論のような企業の社会的な役割とか、あるいはこれから引き出していきたい機能といったものを、どのようなネットワークの中の配置の仕方、どんなところと組ませれば出来るのかというこ

とを、考えています。

【PPT23】私どものネットワークは、市民運動とか行政の人たちが何々ネットワークと呼んでいるものとは全然違います。これは新しい価値とか意味とかを社会に投げ込んで、それが自ずと広がっていくことによって生まれるネットワークです。もう少し違う言い方をすれば“付加価値の連鎖”そのものです。行政の人たちが関わると、ネットワークの組織化をしたがるわけですが、これはピラミッドの平面図に過ぎませんので、結局機能しなくなります。市民運動の中でも権力を取りたい人とか、中心に立ちたい人が出ると、どうしてもこういう動きを組織化しようとする。そういうことが起きないようにあくまで事業を評価してもらい、良くない事業は排除されてしまう。そういった意味ではビジネスと全く同じだと思います。社会に評価される付加価値の高い事業を、いかに提案して実現できるかというところで評価してもらい、勝負していきたいですね。

【PPT24】既存の組織との付き合いが当然出てくるわけですが、縦割りの壁を壊すのではなく、溶かしていこうという発想です。仕切りは必要ですから仕切りの壁を様々な非公式のネットワークで組織と組織を結びつけることによって、なんとなく壁の向こうに伝わっていくようにしていく。例えば、私どもは大手企業さんと協働事業をやっていますが、私どもの事務所の中で、同じ企業の方々が初めて会って名刺交換をして、そして一緒に仕事をしていくことがあります。NPO が絡むことによって、組織の壁が段々薄くなって、膜になっていくような、そういう展開をしていきたい。破壊・構築、破壊・構築という今までの20世紀型発想から、“良き出会いの連鎖”、そして“変容”、そして“変革”という流れにしていきたいということです。

【PPT25】伝統的な日本の家屋と、これは私どもが再生をしている田んぼの谷津田の風景ですが、本当に良く似た美しい光の演出があるのですね。日本人の美意識ですね。日本は膜の文化で、壁の文化ではないと思います。

【PPT26】アサザプロジェクトは、100年計画を掲げていまして、10年毎に昔普通にいた様々な野生生物を取り戻して、100年後にはトキが全く普通に見られる霞ヶ浦の環境にしていこうというものです。生物がただ棲める場所を作っていくという発想ではなくて、新たな社会システムの構築として、今分断されている社会システムの連続性を取り戻すことによって、自然環境の連続性というものが自ずと生成されていく、その結果として野生生物が帰ってくる、という発想です。

【PPT27】年間に1万人を超える小中学生が、環境学習に参加しています。これは非常に重要なことなのです。これが地域の人たち、それから企業や行政を巻き込んでいく上で、大きな推進力となっています。

【PPT28-30】このプロジェクト自体が、子供と大人の持ち味を活かして進めるものになっています。いわゆる協働の場になっています。もう一つ、子供たち、特に小学生に着目

している点は何かという、小学校区というのは、子供が歩いて通うことを前提に空間配置されているので、大体半径 1.5~2km です。これは珍しいことで、弱い人間に合わせて空間配置されているのです。それから日本全国満遍なくあります。これは教育の機会均等です。それから小学校区は面白いことに、一つの小学校区が地域コミュニティにほぼ一致しています。それから伝統的に寺子屋から尋常小学校、小学校という、直接の繋がりはないのですが、地域コミュニティの中で子供たちが育てられるという文化が日本にありますね。そういった既存の社会資源を読み替えて機能させるというのが、アサザプロジェクトのもう一つの戦略です。自分たちでネットワークを作るのは大変ですから、元々流域に満遍なく空間配置されているものを読み替えて新しい機能を付加していく。小学校というのは最初から満遍なくあったもので、これを私どものネットワークの中で機能させる。そして環境というプログラムを戦略的にそこに浸透させていけばよい。これが実際にアサザプロジェクトに参加してきた小学校です。中学校・幼稚園を入れると 200 以上になります。先程、縦割りで仕切られていて、霞ヶ浦流域という一つの生態系単位が面として捉えられないということをお話しましたが、こういう空間の読み替えをしていくと、流域全体が一つの面として捉えられるようになり、新たな技術開発を促す場としても機能していくのです。

【PPT31-32】これは NEC と共同で特許を取得したネットワークセンサーの開発をしているところです。これは宇宙開発管理の研究機関と協働で、霞ヶ浦流域全体の水源地を衛星から把握しようということで、地元の小学生の学習と人工衛星の活用法とを合わせたものです。

【PPT33】科学的な知識と生活知を協働させるということが大事です。どうしても NPO は科学知に偏り過ぎて、全体になかなか展開していかない。むしろ自分たちが持っている地域全体の繋がりを良くして生活知と科学知を上手くコラボレーションさせながら、独自の事業を進めるということが必要です。とりわけ環境系の NPO とか NGO は、本当に専門的な知識でしかモノを考えられなくなっている。自分たちでビジネスモデルを作ったり、地域づくりを提案するということが、なかなか苦手です。それからもう一つ、これから日本が技術開発していく上で、社会システムの構築と一体化した新たな技術やシステムの開発が必要になってくると思います。そういうモデルを戦略的に霞ヶ浦流域で作り上げていこうと、行政や企業に売り込んでいます。霞ヶ浦流域で一つのモデルが出来れば、それを今度は琵琶湖に、あるいは宍道湖、あるいは東アジア、アフリカの様々な流域管理システムに展開していけます。企業や研究機関の持っている独自の技術というものが、システムの構築と一体化してパッケージ化されていけば、新たな世界戦略に繋がってくるわけです。

【PPT34-39】さて公共事業での私どもの役割ですけれども、これは国土交通省と行なっ

た大規模な自然再生事業です。先程言いました34億円の事業ですね。霞ヶ浦の11ヶ所で、行なったものです。こういった今荒れてしまっている環境を、こうやって取り戻しているわけです。これも従来の国土交通省の公共事業には無い様々な要素を盛り込んでいます。いわば公共事業の中に様々な付加価値を生み出していくことも「新しい公共」の視点としては必要なあとだと思います。昔こうだった場所が今こうなっています。面影が全く無いですし、実は記録もほとんどありません。それで、国土交通省の公共事業に福祉事業を直結させました。昔の記録はお年寄りが一番良く知っているのも、地元のお年寄りから地元の小学生が昔の様子を聞き取るわけです。世代間交流事業ですね。そこで得られたデータを抽出して公共事業の計画、再生事業の計画を立てていくのです。“自己完結しない福祉”、“社会のあらゆる分野に開かれた福祉”のモデルにしていこうということです。実際にこのようないろんな絵がお年寄りと子供の間で一緒に話し合いながら書かれていく。まあ1時間くらいじっくりお話して、こういう絵が出来てきた。この中にもものすごい情報が詰め込まれています。これを参考に、国土交通省の自然再生事業を決めていくのです。これはお年寄りにとってもすごく評判が良かったです。「社会参加が出来た」、「孫の世代とあんなに長い時間話できた」と。国土交通省の事業は、子供とお年寄りの出会いの場になりました。今、社会の中で一番欠けているのは、子供とお年寄りの出会いじゃないでしょうか。経験の受け渡しは、人生の中でとても大事なことだと思います。これは、道路を作っても、橋を作っても、公民館を作っても出来ると思います。そういうことをいろいろな地域で進めています。なかなかこれをコーディネートするのは難しいので、想像できないかもしれませんが、実際にこういうことができていくのです。

【PPT40-44】このお年寄りが教えてくれた情報を基に、小さな霞ヶ浦の湖（ビオトープ）を作っていくわけです。これは国土交通省の事業の一環として行ないました。いわば国土交通省の公共事業の波及効果が、予算が無くて困っている学校の中に環境教育の施設を作るという流れを作りました。ビオトープの中には霞ヶ浦産の水草を植えて、学区内のメダカとタニシだけを入れます。そこで増えた水草を湖に植えます。1万人を超える小中学生が、湖に入ってこういう活動をしました。国土交通省の公共事業と連結したために、ビオトープという小さな池がこんなにたくさん一週間にできました。これを文部科学省の予算でやったらモデル事業が一つか二つ出来て終わりですね。しかもビオトープというのは分布しますと、環境観測システムの機能が生まれます。どういうことが出来るかというと、それぞれのビオトープにはその地域固有のいろんな環境を反映させた生き物が集まってくるわけです。森があっても、実際にはすごく環境が悪化している森だと、生き物が来なかったりします。しかし、森がポツン、ポツンしか無いようだけど非常に質の高い森が残っていれば、そこから生物がたくさん供給されてきます。見た目じゃ分からない地域の環境が、集まってくる生物を評価して把握することによって分かってくる。その環境観測システムがこんなにできました。しかも、ここに何百人という子どもたちのモニターが常駐してい

るわけです。黙ってても、頼まなくても、見てくれる。環境省が、例えば環境モニタリングシステムとして、つくばの研究機関あたりでいろんな装置を作ってもらって、研究者を回らせたりしても、これだけのものは出来ないですね。小学生はお金も掛からないし、しかもヒトが育つというものです。

【PPT45】さて、その集まってきた生き物たちがどこから来たのか、という学習プログラムを展開させていきます。トンボやカエル、アメンボとかいろんなものがやって来ます。どこから来たのか調べるために、授業中に学校の外に出ていくわけです。そうすると、いろんな場所にいろんな生き物がいることが分かってきます。要するに“生き物の道（いきものみち）”があるらしいと。

【PPT46-49】ここから町づくり学習になっていきます。人間の目で見えても気が付かない環境の連続性だとか、地域の空間の連続性だとか、空間がこんなに分断されているとか、見慣れた町の空間の全く違う見方が“生き物の目”になることで、出来るのです。いろいろな問題も分かってきます。学校の横に谷間があって、そこには昔生き物がたくさんいたらしいけど、今埋立てられて荒れてしまって、環境が悪化して生き物が通れない道になっている。ところが森がそばにあって水が湧いているので、昔の状態に戻すことが不可能じゃないだろう。お年寄りに聞くと昔はホタルやトンボがたくさんいたらしい、ということが分かりました。そこで残っている湧き水を活かして田んぼや溜池をもう一度復元出来ないか、という計画を立てたわけです。これは4年生です。地元の市役所の職員をゲストティーチャーで呼んで、どうやったら実現出来るかということをお教わります。そして、このような詳細な計画や設計図を作りまして、他の学年や地域の大人を集めて説明会を開く。ここから公共事業と同じ流れになっていきます。さて3学期に話し合いを重ねて出来上がった役割分担を含めた計画書を、市長とか教育長それから担当部署の職員を呼んで、プレゼンをする。ここは市が持っている土地だったので、親水公園づくりをする計画もあったらしいのですが、小学生が実際に地域の人を巻き込んで行なう“公共事業”としてやろうと、市長が言いました。

【PPT50-53】さて4年生が5年生になりまして、この荒れた土地を再生するための造成の手続きを丸1年掛けてやったわけです。造成に必要な書類作成だとか測量、それから詳細な計画が固まってきたところで、最後の住民説明、それから環境アセスメント等を行なって、1年間の終わりにようやく工事に入りました。この事業の中では子供たちは、環境班と福祉班と歴史班に分かれて、それぞれ議論しながら、環境だけが良ければ良いわけではなくて、体の不自由な人や年配の人でも安心して使えるような場所になるのに福祉班も非常に大事である。それから地域の歴史に根ざした設計になってるのかどうか、歴史班が評価する、という流れの中で事業を進めました。このように森からの湧き水を湛えた田んぼが2枚と溜池が再生されました。その後、管理計画を作って後輩たちに受け渡し、毎年完

全無農薬で米作りが行なわれています。次の学年が自分たちもやりたいということで、またその横の荒れた土地をビオトープに再生するという具合です。実際にこうやって出来上がった場所をずっと継続して、下の学年の子どもたちが、モニタリングや持続的な調査を行ない、改善点があれば少しずつ手直しをしていくということで、これはいわば、大人がやる公共事業よりも遥かにしっかりした公共事業になっています。

【PPT54-57】 もう一つ次の展開があります。この谷の上流に団地がありまして、最近話題のゲリラ豪雨によって、この谷が浸水するようになったのです。洪水が襲ってくる感じですか。折角増えてきたメダカとかトンボ、カエルが流される。この問題を何とか取組まないということ、谷の上流に上がって行って、雨水の流れ、行方について調べています。そして、問題の箇所、水が溢れる場所だとか、自分たちが提案した雨水浸透升とか雨水タンクの設置を重点的に行なう場所を調べて、住民に知らせることを市長に提案したものです。学校の中で実際に雨水タンクや雨水浸透升を自分たちで設置して、どの程度効果があるかを検証しています。

【PPT58】 この取り組みには、茨城県の牛久市内に 13 ある小中学校全てが参加しています。7 年目になりますが、私どもがコーディネーター役をして、市の関係部局が子供たちの提案を実現させるために、横断的に連携をしています。専門家も入って、子供たちの学習が実際の町づくりに直結するような流れを作っています。これは、子供たちのお陰で逆に縦割りの市の各部署が繋がっている、という流れになっています。

【PPT59】 同じような取り組みで、霞ヶ浦の東側にある北浦という、霞ヶ浦の一部ですがけれども、そちらの鹿嶋市でも同じように小学校を基点とした町づくりを行っています。これは鹿嶋神宮所縁の土地を再生していくということです。こちらの場合は自治会や地区公民館が大きな役割を果たしてくれています。こういった協議会を私どもが作って地域の連携の中で、子供たちの提案が一つの発端になって、地域で今までどうしても再生できなかった場所を再生するというのです。

【PPT61-62】 これが企業と協働で行っている水源地の再生事業です。こちら行政がほとんど手を付けられなくて、これは私有地で元々田んぼだった場所ですので、荒れ放題になって、ここに産業廃棄物が捨てられたり、埋められたりしてしまうのです。ですから、ここをもう一度田んぼとして活用することが大事なのです。水源地ですから、出来れば無農薬で環境保全型の農業をしていく、それが霞ヶ浦の再生に必要なことだということです。これは全く行政が手付かずの状態、私どもが新しいアプローチで実現したものです。いろいろな企業さんに参加いただいて、延べで 8 千人以上の方々に協力いただいています。全ての場所で、今全無農薬でお米を作っています。霞ヶ浦流域の 10 ヶ所くらいで行なっています。

【PPT63-71】 地元の方々との交流も盛んに行なわれています。それぞれの場所のそれぞれ

れの谷津田で無農薬で作ったお米は、それぞれの地域の造り酒屋さんでお酒に仕込みます。これにも地域の皆さん、企業の方々が参加します。これは NEC さんと協働で造っている地酒です。これは三井物産さんです。それぞれ違う造り酒屋で、場所も違います。これは UBS 証券さんです。写真がありませんが、やはり地酒を造っています。これはホギメディカルさんで、こちらもお酒を作っています。こちらはお酒は造らないのですが、損保ジャパンさんと協働で取り組んでいます。谷津田の再生で、お酒がこれだけ出来ました。もう一本今年新しく出来る予定です。年々谷津田が再生され、新しい地酒が出来てくる。霞ヶ浦流域にこれだけ造り酒屋さんがあり、この中に満遍なくネットワーク状に谷間の水田があり、みんな荒れています。ですからここに企業さんと地元の造り酒屋そして農家と地域の住民がセットになって、「広がれあさぎの夢」というブランドの地酒を作る。そうしますと、ほぼ霞ヶ浦の流域全域で将来的に水源地の再生が実現します。先程のトキは水源地の谷間の水が湧いている場所が好きなんです。環境省さんとか県とか市からお金を出してもらわなくても、保護区域を一切作ってもらわなくても、この地酒のブランド化でトキが帰ってくる。しかも持続的に維持出来て、維持費は掛からないという体制が作られる。これは価値創造的な取り組みということで、昨年行なわれました第1回生物多様性日本アワードのグランプリを受賞させていただきました。

【PPT72-78】 キヤノンさんとも協働で耕作放棄された畑を再生して、私どもの循環型事業の中で、一石何十鳥もの効果を生み出して行こうという「WIN-WIN 型循環社会の構築」というのを今年から始めました。耕作放棄地を畑にして、ヒマワリを栽培する。その肥料には駆除した外来魚を使います。そして油を搾って、せんべいを作ります。せんべいには霞ヶ浦の漁協さんからエビを買い上げて、えびせんにしします。そのせんべいを加工する作業は、地元の福祉作業所をお願いします。揚げた油の廃油は BDF として自動車の燃料に活用する。これはうちでプラントの委託を受けてやっています。これは実際の荒れた場所を再生してヒマワリの栽培をしているキヤノンマーケティングの社員の方たちです。これがえびせんです。このエビは密漁しない漁師さんや生物多様性保全に寄与する漁業者からしか買い上げない。地元の商店の人にも協力いただいて、地元商店街の活性化にも繋げて、将来的にはキヨスクなどでブランドとして販売していこう、という流れになっています。キヤノンさんのこの事業は一石何十鳥も効果が生まれると期待しています。

【PPT79-80】 いろんな企業さんにご支援をいただいておりますが、事務所の組織運営費としては、何年もセブンイレブンさんから助成をいただいております。

【PPT81-86】 生物多様性の保全に関しても、行政とは大分違う取り組みをしています。霞ヶ浦はものすごく外来魚が増えています。行政では報奨金を出して、年間例えば1千万なら1千万を出して、何トン当たりいくらというお金で漁師さんから買い上げそして、捨

てるわけです。その補助金も段々予算が無くなって減らされていくという状況で、継続性は当然無いです。その程度の外来魚を取り上げても、あの大きい湖の中で外来魚を減らすことはほとんど不可能なのです。ですから大規模で継続性のある事業を展開していかねばならない。ということで何をしているかということ、霞ヶ浦には2つの漁協があるのですが、そこから外来魚を買い上げます。それを地元の流域にある加工業者にフィッシュミール、魚粉に加工してもらいます。それを地元の流域の農協さんと有機農業団体などで、野菜の肥料に使ってもらいます。そこで採れた野菜を「湖が喜ぶ野菜たち」というブランド名で、地元の手スーパーで販売するという流れを作っています。毎年100トンを目標に外来魚を買うのですが、年間1000トン以上買い上げたいと思っています。そうしますと確実に霞ヶ浦は外来魚が減ります。これは行政が補助金を出しても出来ないです。もう一つ、霞ヶ浦で懸案になっている水質の改善なのですが、外来魚というのは水の中で食物連鎖の頂点にいますので、植物プランクトンから動物プランクトン、食物連鎖を通してリンや窒素という水の汚れの原因になる物質を、体に高濃度で蓄積しています。ですから外来魚を捕獲するとリンや窒素を塊で湖から取り出すことが出来るのです。つまり、魚粉は肥料になりますので、この肥料をどんどん使うことによって、湖からリンや窒素がどんどん取り出されて、しかもこれはお金に換わってくれますので、水質改善に繋がる。今、例えば行政は、年間5億円くらい掛けて底泥浚渫とか、いろいろな水の汚れを取るための事業をやってますけれど、これは本当にお金を使えばなしで終わってしまう循環しない事業ですね。これを地域の経済主導の中で水質浄化が生まれるような流れを作っていくわけです。実際にはイオングループのカスミスーパーという地元で一番大きなスーパーの24店舗で5年間販売をしています。「湖が喜ぶ野菜たち」です。それから先程お見せしたお酒です。レシートに「広がれあさぎの夢」とありますが、アサザブランドになっています。これは、先程お話したように1000トン以上の水揚げを実現させるために、今私どもが一生懸命働きかけているのがビールだとか、ポテトチップスの原料生産に、外来種の魚粉を使ってもらおうことです。企業さんとしては「年間何百トンの外来魚駆除の協力をしました」とか、「リンや窒素を何トン回収しました、水質浄化を実現しました」と袋の一部に書いてもらって、社会貢献をアピールしてもらおう。これが実現しますと霞ヶ浦は確実に水質が改善できるはずですよ。先程お話しましたが、水質改善に1兆円のお金が使われても全然良くならない。従来の自己完結型、縦割りの発想から、こういうビジネスモデルの展開へ、価値創造的な展開にしていくことによって、霞ヶ浦の問題解決が初めて実現するのではないかと思います。

【PPT87-90】アサザプロジェクトというのは他の地域でも結構応用可能でして、今、日本全国各地でアサザプロジェクトをモデルにした取組みが行われています。これは秋田県の地域振興局と7年目になりますが協働で行なっているものです。秋田県の八郎湖の再生

事業と言いまして、流域の環境保全、地域の活性化、湖の再生を実現させて行く取組です。秋田県には八郎太郎物語という有名な物語がありまして、この物語を活かして巨大な竜を呼び戻す事業を進めています。最初の授業に行くと、最低黒板3枚用意して下さいと、竜を呼び戻す授業から始めます。こちらから2004年から8千人を超える小学生に授業をしています。秋田県では人口流出が大きな問題になっていますから、将来優秀な人材の若者たちが自分で事業を起こして、そして地域に根付いてもらうための人づくりをしていかなければならない。これは八郎湖再生のためのモノづくり、ブランド化していこうということ、秋田県地域振興局と地元小学生が一緒になってやっています。4年生1学年が全員、委員になって会議を開きながら、県の職員も来て一緒になって会議をしながらブランドづくりをしていくというアクションです。ブランドが出来上がって、地元の商店会長とか佃煮とか業種の代表の人たちに来てもらって、これを使って下さいという、セールストークの練習です。

【PPT91】これはやはり商店街の活性化と地域の環境再生を一体化した取組です。松戸市では、江戸川と坂川という川を活かした町づくりを始めました。川に生息しているハグロトンボという、非常に弱い生き物なのですが、それをシンボルにした町づくりです。これは地元の商店街に子供たちが行って聞き取りをしました。今後、子供たちから商店街に新しいイベントの提案をしていく、ということです。

【PPT92】NEC キャピタルソリューションと協働で東京都心部に生き物の道を広げていく取組みをしています。

【PPT93】こちらはシャープさんと協働で、日本全国の小学校を廻っています。地球温暖化の問題、環境リサイクルの問題、それから一番大事なことで地域との繋がり、地域生態系をうちが担当しています。気象予報士といっしょに学習展開をしています。

【PPT94】霞ヶ浦の再生が展開していくと、川や湖を通して東京都心部にも生き物が供給できます。悪化した都市環境をいかに良くしていくかという発想ではなくて、生き物の道をもっと増やしていくというプラスの発想で環境学習をやることによって、地域に対して前向きな働き掛けが出来る効果があります。

【PPT95-99】その一つのシンボリックな事業としては、原宿、表参道を中心に今私どもが行なっている事業です。今年8月に1回やって、10月にもう1回やる予定ですが、原宿の表参道商店街の人たちと協働で、地元のアーティストの人たちや子供たちなどと一緒に、新たな場の創出をしていきます。一つ大きな要素となるのは、明治神宮の中にある谷津田です。東京都心部に唯一残っていて、しかもここに里山の生物が一杯残っています。この谷は実は竹下通りに直結しているのです。一番上流には“清正の井”というのがあって、水が湧いています。この水は竹下通りの暗渠を流れています、旧・隠田川です。実は谷津田はこの地形に丸ごと残ってしまっていて、明治神宮はこの谷に囲まれているのです。ここ

に清正の井があって、この先がさっき見ていただいた明治神宮の神苑です。そこからずーっときて、ここが竹下通りです。実は都市にこういう里山的な環境が丸ごと残っているのが、分かってきました。

この明治神宮になっている大きな森から、涼しい風がこの谷方に流れ込んできます。冷えた風は空気が重たいので、谷底に流れてきます。これ全部が風の道なんです。涼しい風に沿って昆虫も移動してきます。昆虫というのは気温が高くなり過ぎると、変温動物ですから活動できなくなってしまいます。涼しい風のあるところにずーっと沿っていくんですね。この谷全部がトンボとかチョウの道なわけです。それを明らかにしようということで、風船や網を持ってみんなで調べていくというイベントです。実際意外と多くの生き物が見られたり、涼しい風が結構流れているのわかります。もう一つはこの地域固有の谷の地形をデザインのモチーフにしてもらって、原宿全体の共通のデザインとしてブランド各社に提案して、みんなで共通のデザインコンクールをやったら面白いのではと提案しています。

【PPT100】同じような取組みを、今北九州市でも行なっています。紫川という川の流域を川と町を繋ぐ学習と町づくりの提案をしていく予定です。

【PPT101】京都でも、誰でも良く知っている賀茂川が、実は山から流れてくる涼しい道になっています。つまり生き物の道になっているので町の中に涼しい風が、賀茂川から流れてきて、それに沿って生き物が移動していきます。それは今まで誰も調べてないので、地元の小学生と一緒に調べています。それからもう一つは過去の記録が相当残っているので、昔はどういう生き物がいたかを調べて、昔と今の比較をして、昔のようにどうしたら涼しい風が流れるのか、生き物が広がっていけるのか、という計画を作って提案をしていきます。

【PPT102】こちらは京都とは全く正反対の過疎地です。三重県大紀町という伊勢神宮所縁の宮川の上流部にある過疎地域です。過疎対策とあわせた環境学習、これはお茶が荒れて来ているのですが、これを再生して無農薬で新しいブランドのお茶を作ろうということです。これはキヤノンさんが協働で取組んでいます。

【PPT103-104】こちらは沖縄です。沖縄固有の問題があるということで、宮古島、多良間島というところですが、こちらは100%地下水に依存した地域でして、隆起サンゴ礁の島で川や湖が全く無いのです。ほとんど地面に浸み込んでしまうのです。地下水の保全をしないといけないという大きな問題があります。今サトウキビ栽培を始めとして、農薬や化学肥料の多用によって水質が悪化してくるという問題が起きています。そこで環境保全型のサトウキビ栽培を普及させ、かつ、付加価値の高いサトウキビをブランド化していくという取組みを地元小学校の環境学習を起点に行なっています。クヴァ・メールプロジェクトといって、伝統的な日本の扇子の元になったクヴァ扇ですね。これはご神木です。これを南の風を送るシンボルとして、原宿のイベントと多良間島、宮古島の環境学習を繋いで、ブランド装置の場になっている原宿で、この島で採れる無農薬のサトウキビの黒糖を

ブランド化していく予定です。

【PPT105-110】さて、霞ヶ浦流域でもブランド化の戦略は行っています。これはウナギです。世界的に今減っているウナギをこの霞ヶ浦流域で再生しようという試みです。この赤い部分は森を示してまして、細い筋がみな谷津田です。約 1000 本あります。ものすごく谷が多いのです。明治神宮を囲っていたのと同じような谷が一杯あります。霞ヶ浦には大型の流入河川が 1 本もありません。56 本の小さな川が集まって出来ている湖なのです。この地域的な特性を活かして、これらの網目状の水系を活かして、ウナギの一大生産地にしたいと考えています。ウナギというのはグアム沖で生まれて黒潮に乗って、例えば利根川に入って霞ヶ浦に来て、先程からいっている谷津田という一番上流の里山で育つのです。大体約 7 年くらい。そして海に戻って産卵するのです。ウナギは今世界的に減っているで、希少価値です。ヨーロッパウナギは、ワシントン条約で指定されて取引さえ出来ない。アメリカウナギも絶滅寸前、ニホンウナギもこのまま行くといなくなるので、養殖で何とか持たせるしかないといわれています。一つの提案としては、下流に水門が国土交通省によって作られていて、これを今の規則を少し見直して柔軟に、シラスウナギが海から上がってくる時に、ちょっと潮が湖に入れるように柔軟に管理していく。これは操作の見直しが必要なんです。それをしてもらえば、沢山の魚が上がってこられる。これを UFJ 総研（現三菱 UFJ 総研）さんに試算してもらいました。ウナギだけではなくほかの魚も戻ってきて、年間で 308 億円、毎年毎年 308 億円の漁業利益増が見込めるという試算が出ています。こうすると世界的に獲れなくなっているウナギが、霞ヶ浦では天然ウナギが沢山獲れて、しかも観光に良い。そして環境や地域活性化に繋がっていく、という流れが出来ます。書き忘れましたが、ここの漁獲高、生産高、ものすごい量の魚が獲れるようになり、先程の外来魚の場合と全く同じで、魚の体にリンや窒素が蓄積されますので、これだけの魚を漁師さんが自分たちが努力して獲ってもらうことによって、リンや窒素が大量に湖から取り出されるということで、従来の行政がやっているさまざまな水質浄化の事業より遙かに、まず 10 倍か 20 倍の水質浄化の機能がここで産まれる。しかもこれは税金を全く投入しないで、地域の経済活動によって、湖の水質が浄化される、という流れになっています。

【PPT111-120】これは牛久市内で行なっている地球温暖化対策です。これも農業や福祉、教育といったものと連結させて行なってきたものです。私どもの取組みは全てが小学校や中学校における環境学習と一体化しているところに特色があると思っています。

【PPT121-124】最後になりますけれども、NPO を社会の中でどう機能させていくかということですが、私どもの今までの話を聞いていただくと分かると思うのですが、行政の機能を補完する役割の NPO ではない、ということです。いわゆる縦割り・硬直化した行政シ

システムを温存するような、何とか中で機能を持たせるような発想はありません。むしろ自分たちでネットワークを作り上げ、その中で行政が今まで以上に仕事をし易い、あるいは企業が今まで以上に価値創造できるような“場”を見出していく、ということを考えています。循環型社会というのは、社会システムの再構築が無ければ当然出来ないわけですね。

ここにホルモン・触媒と書いてありますが、社会を人間の体に例えれば、血液が足りない・足りないという話ばかりしているのではないかと私は思っているのです。税収が少なくなる一方で財政的に厳しいからどうしたら良いのかと、末端組織まで血液を送るために増やすしかない、増税するしかない。あるいは届かないところは無くしていく（廃止）しかない、あるいはタダ同然で NPO に任せるしかない、というネガティブな発想しか今まで無いのではないかと思います。「新しい公共」というのは、ここから一つ抜け出そうという視点が必要だと思います。人間の体に社会を例えたとしたら、血液だけではなくて、ホルモンが当然あるのではないかと。人間の体の中でも微量のホルモンが、離れた組織と組織を結びつけて新しい機能を産み出しているし、体全体の機能を活性化させる。このホルモンの役割をする組織・主体というものについて、今まで全く議論が無かったのではないかと。あるいはそういう社会設計が、なされていないのではないかと私は思います。

今までの私が紹介させていただいたグループを見ていただければ、うちの NPO は小さなものです。職員は 10 人しかいません。財政的にももっと大きな NPO が一杯あると思います。でも、うちのような小さな NPO でもあれだけの仕事ができるし、あれだけの事業を興こせます。これは私どもがいわば“中心の無いネットワーク”という戦略の基に、離れた組織と組織、今まで出会うはずの無かった組織と組織を独自の文脈で繋ぎ合わせて、新たな価値を創造していくという戦略を自由に展開しているからです。こういう展開をしていけば、今眠っている組織と組織がいっぱいあると思います、組み合わせも無限大にあります。そうすれば社会に潜在する新たな公益はいっぱい見出せる、ということで社会に対してもっと前向きな展望が示せるのではないかと、というふうに考えています。以上です。

(了)